O2　盤亀台岩刻画の捕鯨図再検討

平口哲夫（金沢医科大学）

A reexamination of the whaling pictures of the Bangudae petroglyph in Ulsan, Korea

Tetsuo Hiraguchi (Kanazawa Medical University)

韓国盤亀台岩刻画の捕鯨図のなかで最も重要な「銛綱使用の捕鯨図」（以下「捕鯨図」と表記）については，浮き袋も描かれているという説（張，1997）がある．この説が正しいかどうかを確認するため，2008 年 5 月 17 日，第 14 回蔚山くじら祭りに参加した際に現地見学し，また韓国鯨類研究所で意見交換会を持つことができたので，「捕鯨図」について再検討してみることにする．

1982・83 年真脇遺跡から多量出土したイルカ骨の調査を機に，先史時代捕鯨に関心を持った演者は，盤亀台岩刻画の調査報告書（黄・文，1984，以下『報告書』と呼ぶ）を入手し，その鯨類画を見て，鯨種をいくつか同定できそうだと思った．そこで，1990 年 2 月，千葉県鴨川市で開催された第 2 回ＩＢＩ研究集会にて盤亀台岩刻画を紹介，また，同年 5 月，日本考古学協会第 56 回総会と日本海セトロジー研究グループ第 1 回研究会にて，盤亀台の鯨類画がセミクジラ，コククジラ，ナガスクジラ属またはザトウクジラ，アカボウクジラ科？，ゴンドウクジラ属？，マッコウクジラなど，少なくとも 6 種同定できることを指摘した．さらに同年 7 月末～8 月初に韓国を訪問，釜山水産大学教授の朴九秉先生（1930 - 2006）に導かれて盤亀台を見学したが，岩刻画は水没状態にあり，周囲の地形を観察するにとどまった．また，2003 年 5 月末～6 月初に第 9 回蔚山くじら祭りに参加したときは，台風のため現地見学さえできなかった．

今回，盤亀台を訪れてみると，岩刻画のある岸壁の対岸まで歩道が建設されており，歩道入り口の駐車場から楽に歩いて行けるようになっていた．対岸には岩刻画の実大図と望遠鏡が設置されていたが，望遠鏡を覗いてみても鮮明には見えないため，河原に降り立って水流まで近づき，カメラの望遠レンズを通して見たところ，いくつかの画像を確認することができた．しかし，肝心の「捕鯨図」は見あたらなかった．

韓国鯨類研究所に隣接する“くじら博物館”には，盤亀台岩刻画の実大レプリカが展示されているが，「捕鯨図」があるべき箇所を見てもその図はない．「捕鯨図」は，比較的小さく，細く浅い線刻によって描かれているので，この図がレプリカに示されていない原因がレプリカ制作の技術的制約によるのではないとすると，ダムに水没していた岩刻画が異常渇水で最発見された 1971 年当時よりも岩刻画の風化が進み，レプリカ制作時には不鮮明になってしまったのかもしれない．ならば，再発見当初に撮られた写真や拓影の資料的価値はきわめて高いことになる．そこで今回改めて『報告書』に掲載された写真や拓影を見てみると，「捕鯨図」の銛綱に接して描かれている浮き袋状の線刻は，その捕鯨図とは違って太目の荒っぽい刻み方をしていることが分かり，「捕鯨図」とは別に描かれたとみなす報告者の判断が正しいという結論に達した．